

答えはないという答え

著：小幡知史

企画：渡辺修宏

小幡知史

二階堂哲

記憶に残っている漫画

渡辺先生から本企画のアイデアをお聞かせいただき、「自身が最初に読んだ漫画は何だったろうか」などと、漫画遍歴について振り返ってみた。幼少期、おそらく小学生くらいの時は、少年誌（私の頃はコロコロコミックやボンボンなど）をよく読んでいたような気がする。その中でも、特に記憶に残っている漫画となると、それは偶然にも、前回の二階堂先生と同じく、「風の谷のナウシカ」であった。

当時、父親の書斎に「風の谷のナウシカ」の漫画版があり、何の気なしに手にとった記憶がある。その頃は、すでにアニメ映画版の風の谷のナウシカを観ていたため、「映画の続きなのかな？」と、ワクワクして手にとった。しかし中身を開いてみたら、当時の自分にとってはなんだか不安感というか、恐ろしさを感じさせるタッチで、一瞥して漫画を閉じた記憶がある。しばらくは恐怖の対象としてナウシカの漫画を記憶していて、高校生くらいになるまでは結局、中身を読んでいなかった。

本原稿を書いていて気づいたのだが、記憶にあるのは、画風に対するショッキングさだけで、中身についての印象はなかった。では、渡辺先生や二階堂先生が紹介してくださっているような、私の価値観、ひいては対人援助の道を選ぶことに関連する漫画とはなんだったのだろうか…。

そう考えた時、即座に、「家裁の人」というタイトルが思い浮かんだ。

ヒーローなき漫画

「家裁の人」は、毛利甚八作、魚戸おさむ画の青年漫画であり、家庭裁判所の裁判官を主人公に据えた漫画である。なお、「家裁」の「さい」は盆栽の栽であり、これは物語に必ず植物のイメージやモチーフが盛り込まれているためだったかと記憶している。

家裁の人にはヒーローがいない。この漫画について思い出したときに、瞬間的に浮かんだイメージはこのようなものだった。確か、本書を初めて読んだのは中学生くらいだった

かと思うが、それまでの私の漫画遍歴は上述のように、いわゆる少年漫画で満たされていた。

物語には必ずヒーローがいて、そのヒーローが主人公として物語を進め、事件や問題を解決していく。それが、何となく私が漫画に抱いていた当時のイメージだったと記憶している。しかし、「家裁の人」の主人公である桑田判事は、決してヒーローという訳ではない。たしか、物語の序盤は様々な事件に対して解決の糸口を見つけ、ハッピーな結末に持っていく展開も多かった気がする。しかし、しばしば、主人公である桑田判事は、当時の私からすると意外な“人間らしさ”を見せる。詳しい場面などは手元に本がないので思い出せないが、桑田判事は悩むのだ。そして、「答えを出さない」場面もしばしばあったように記憶している。

「人って、面白いな」

私の勘違いかもしれないが、私が本書から得た、「答えがないという答えもあるのか」という気付きに、大きな衝撃を覚えたことは確かである。今となっては当たり前の話であるが、人にはそれぞれ、歴史や背景、価値観、動機など、語り尽くせないほどの膨大な“答え”がある。

家庭裁判所で繰り広げられる事件には、それぞれの“答え”が交錯し、対峙し、否応がなしに“判決という答え”を迫られる。そのような濁流の中で繰り広げられる登場人物たちの思考や行動に、強い感情移入をしたように思う。またそういった経験の中で、「人って、面白いな」という、思いつきのような気持ちが、今の対人援助についての動機の1つとなっている気がする。

色々思い出すと、私を対人援助の道に導いたであろう漫画は、まだ、いくつかある。それは、次回に紹介させていただけたらと思う。